

大陸（満州）

伝統に生きた

工兵第十一連隊

愛媛県 福井 一郎

現役兵として入営する以前の思い出です。

昭和十六年四月。場所は東京の皇居前の大広場。会合の名目は覚えていませんが、とにかく全国大会で、天皇陛下の御親閲がありました。

私は村の代表としてただ一人参加できました。天皇陛下は愛馬「白雪」に召されて、私のすぐ前を通られました。私は本部付きの伝令として、大隊長（在郷軍人）の傍らに控えておりました。感激と恐懼（きょうく）で何もわ

からない状態で式典は無事に終わりました。十九歳の若いときの光栄ある良き思い出です。

昭和十七年一月十日、現役兵として、香川県善通寺の西部第三十七部隊へ入営です。当時の私の家庭の様子は次のとおりです。

父 職業 大工 健在 四十五歳

母 健在

本人 職業 大工 健在

弟 職業 設計士 健在

弟は一人で、後年沖繩で戦死。

父は大工の棟梁で弟子も数名抱えて、代々つづいた請負業を営み、私は父の下で修業中の身でした。家計は普通で平和な家庭に育ちました。父は短気で無口、仕事場ではよく金槌を投げつけて叱ることがありまし

た。私は業務上の知識や勉強については、とにかく本を沢山読んで研究を熱心にやりました。普通の建物だけに満足せず、むずかしい神社仏閣の高度な分野まで積極的に進みました。

時あたかも大東亜戦争に突入直後のこととて、緒戦を飾る相次ぐ勝報に国内は沸き立つ興奮状態。男子と生まれて帝国軍人に召され、家門郷党の絶大な期待の裡に盛大な見送りに励まされ、「祝入営 福井一郎君」の幟も数多く、男子の本懐と肝に銘じ元気いっぱい、謝辞と覚悟をのべて故郷を出発したこと、五十年余りを経た今日も、はつきりと脳裡に去来します。普通寺では工兵連隊第一中隊第一班へ編入されました。

ここで工兵とは？工兵第十一連隊とは？ですが、「善工会」という戦友会が発行した工兵十一連隊の歴史の本をひもときますと、次のようです。

工兵の種類には、

- 一、野戦工兵
- 二、坑道工兵
- 三、船舶工兵

四、黒龍江などの大河渡河工兵

となっており、私の入隊したのは一般野戦工兵です。もともと工兵とは、軍隊内での唯一の技術、工作部隊であり、鉄道兵、航空兵、戦車兵なども発足時は工兵より出発したそうです。新兵も大工、鳶職、土方、漁師たちが大部分です。

工兵の新兵教育としては、まず基礎教練があり、土工作业、連結作業、植杭作業、漕舟作業、発破作業等です。

土工作业とは、いわゆるスコハネであり、円匙えんぎ（スコップ）と十字鍬（ツルハシ）で一分間約二十回の速度で投土を行うのです。雪のちらつくとき、上半身裸で四時間連続投土をやる帽子からも汗が流れ出る状態です。工兵はよくみみず切りと言われましたが、大工の私には難行苦行でした。

連結作業とは、約二メートルの麻縄を使い、結着、連結の作業を行い、丸太を使って足場を作っては解体し、作っては解体するというものです。高所の連結では「ドモグラ」と叱咤されます。結着とはまず、紐の

先を目的物に固定する結び方で、鵜の首結び、添え結びなどがあります。丸太と丸太を結ぶときは、十字結び、箱結び等があり、解けないように「割り」を何回と指示され、結着は引き解き結びなどで結び止めをします。結び方もいろいろあり、それぞれ理に叶ったやりかたです。錨を止める錨結び、船を連結する舳い結び、舳い網を止めるかこ（水夫）結びで、別名徳利結びとも言います。八重結び（引き解き結び）などです。

植杭作業とは、杭打作業で、掛矢（軍隊では頭は鉄で出来ている）で杭を打つたり、二人用の築頭ともいうもので杭を打つ基礎教練です。

漕舟作業とは、櫓で鉄船や折畳船を川や海で練習します。生まれて初めて櫓を握るので最初はまごつきますが、すぐ慣れてきます。しかし本職のような力強さ、持久力はなく、とくに流れのある川を上流に向かって漕ぎ、標識を回って戻って来るのは大変きつく、私には徳島県三好郡著蔵村の廠舎のことが思い出されます。これまた土工と同じで手に豆が出来て困りました。冬でも地下足袋で水虫のある者は困るし、トロトロして

いると垢取りで水をかけられる、川の中へ投げ飛ばされたり大変です。竿の訓練もありますが、重点項目ではなく、また「竿三年、櫓三月」の諺のごとくむずかしい作業です。

発破作業とは、爆薬や導火索の使用について基礎訓練をすることで、工兵はダイナマイトは力が弱くて使わず、主として黄色薬、茶褐色薬と雷管、導火索、電気雷管を使用しました。導火索と雷管の接続方法、導火索の切り口に少し穴をあけておくと効果的であるとか、鉄条網爆破に使うガス管を使う装薬とか、応急に割竹を使って作る七メートルの装薬（肉弾三勇士が使用したもの）には弾薬何個ごとに雷管を挿入する必要がある。

肉弾三勇士は久留米第二十四混成旅団工兵第二中隊所属の三人である。

工兵一等兵 作江伊之助

// 北川 丞

// 江下 武次

この三勇士は昭和七年二月二十二日午前五時、上海地

区の廟行鎮の戦場で爆弾を抱いて突撃散華しました。この勇敢な行為は、肉弾をもって敵中に突撃したと、終戦まで軍国の華として帝国軍人の模範とされました。このように割竹製装薬で鉄条網を爆破する作業は三人（一人は予備で一人戦死してもあと二人でやれる）で装薬を持って鉄条網に接近し、装薬を鉄条網の下に挿入し、点火して後退するか、予め点火して挿入する方法とがあります。

肉弾三勇士の場合は戦況困難であるから、予め点火して挿入し、その時三人とも敵弾に倒れ、爆死したものです。一キロの黄色薬で鉄道のレールにくつつけただけで切断可能な強力さがある。爆薬自体はそう危険ではなく、火をつけても燃える程度で爆発しない。雷管は危険極まりない代物で、叩いてもすぐ爆発し、指の一本くらいは容易になくなります。演習中の事故も多く犠牲者の出ることもあります。そのような場合、統括指揮していた将校は厳しく責任を追及されます。

工兵は人手による作業で任務を遂行するので、兵を失うことは強く禁じられていました。野戦で工兵が放

置した鉄条網爆破用のガス管装薬を、後から来た歩兵が単なるガス管と誤認し、飯盒炊事の棒に使うて爆発し、犠牲者が出たこともありました。支那や南方では爆薬やダイナマイトを使って川や海の魚をよく捕り、マイト五本くらいで米袋三十杯もの収穫もありました。工兵の装備は銃は三八式歩兵銃で歩兵と変わらず、ただ携行する弾が少ないだけの違いですが、円匙や十字鋏、斧や鋸の七つ道具を背囊に分担して付けますので行軍は大変だし、また戦闘も歩兵と同じように行います。

さて、普通寺で入隊すると、毎日大麻山へ通い、基本教育の散兵壕掘りの練習です。生まれてから土方の経験はないので、手に豆は出るし苦しくて困りました。私は体が小さいので何とか要領よくと工夫しましたが、思うようにはいきません。

三月三日より徳島県三好郡箆蔵村洲津の廠舎で吉野川での漕舟訓練です。櫓漕ぎは腰でこくと教えられました。生憎と腹下しを思い、これまた意のごとくなら

ず、成績は甲乙丙の乙となつてしまいました。もうと
にかく痛い、苦しいの限度を超えての苦痛に、もうヤ
ケクソになり辛抱忍耐しありませんでした。

やつと十八日の基本教育終了。四月十日工兵第十一
連隊転属のため坂出港より乗船出発。善通寺へ坂出間
十一キロは徒步行軍です。内地部隊での内務班生活は
あまりピンタはなく、大事にされたように思います。

四月十二日釜山へ上陸。列車輸送で北上、^{とん}囷們を經
て満州東安省虎林の第十一師団工兵第十一連隊へと夢
と不安の新兵列車はひた走つたわけです。十七日虎林
到着。駅もプラットホームもない。「こんな所！大変
じゃ！」と暗いムードに包まれました。生憎と雪解け
の季節。ビシャビシャの道なき道、泥んこ道を四キロ
向こうの兵舎まで歩くのです。やつと兵舎に着き、や
れやれと思う間もなく、士官学校出のハリキリ教官殿
より「四国の山猿が来たか！どしどし仕込んでやる。
覚悟せい」と一喝されました。

工兵第十一聯隊歌 岩本 清 作詞

一、天にそびゆる象頭山 金刀比羅嶽の山おろし

翼も高く飛ぶ鳥の
南海四国の国護る
げに国軍の華なれや
襟にとび色かざりたる
忠勇無双の健児こそ

二、金城鉄壁ゆるぎなき
埋めし火薬二千キロ
爆声高く地は裂けて
敵のほろい影もなし
無残や残る爆煙に

三、韻々轟々砲声は
星影淡き戦場を
鉄条網や鹿砦を
縦隊の途開くなり
闇の戸帳に包まれて
音なく進む破壊筒
微塵に砕きて突撃の

四、大麻山の地中戦
秋陣營に霜降りて
戦鬪経過のその間
戦勝の途開くなり
吉野の川の漕ぎわたし
兵馬も勇む大演習
特有の技術ふるいつつ

五、一朝国に事あらば
我が身は重し我が任務
共にたおれん国のため

シベリア、ウラルの山かなた

暴逆ニコウ海彼方 君に捧げし一命を

なげうつ時は将何処

対ソ作戦の重要度、むづかしさ、酷寒の北辺の守りとどれ一つ見ても容易なことではなく、訓練と内務もきびしいものでした。

漕舟訓練のうち、舟庫（フナコ）の折畳式鉄船を六人で担ぎ移動するのです。これには重くて肩が腫れ、皮がむけ、血が出て傷になる始末です。自分独りでなく全員同じことです。傷ついた肩で毎日担ぐ。あまりの辛さに泣きだす者も出る。最後にはもう死んだがましじやと意地になって頑張るのです。「歩兵の足まめ、靴づれ、騎兵の尻皮むけ、内腿むけと他兵科の初年兵も皆苦労しているのだ。この苦しさを乗り越えて始めて兵として一人前になる。古兵も上等兵も班長も皆同じことをやって来たんだ」と教えられるわけです。訓練で泣け、実戦で笑え、です。

内務班内では古兵が新兵にゴボウ剣を投げつけてくる。危険この上ない。とかく工兵とはやくざと暴れん坊の集団と知らされる。スリッパ（上靴と呼ぶ）の踵の部分でビンタをはられる。十五回くらいまで分かつ

ているのですが、それ以上になると倒れて意識も不明になります。もう死んだほうがましじやと戦友同志慰める言葉もなく涙を流すのです。もちろん口の中は切れて腫れて食事もできない。初年兵のあの頃の辛さ、きつさを思えば、人生何一つ恐れるものはない。一生涯生き続けて行く上の尊い試練であったと思います。それでないと気持ちの納めようがありません。

虎林では教育訓練のみで、作戦討伐はなかったのです。警備というが実戦はなく、それだけに演習も内務もきつかったのでしょうか。

また、同年兵の戦友に私が金を貸したという誤りの事件が発生、私は班長、古兵に半殺しにされるほど叱られました。最後まで黙って耐え忍び、後で事の真相が判明して私の無実の罪がはれました。中隊長殿の氏名は伏せますが、立派な将校で後日、士官学校の教官として栄転されました。その無実の事件以来、私は中隊長殿に「死ぬ時は俱ともに死のうぞ」と大変可愛いがつて大事にしてもらいました。今もお元気で毎年年賀状を賜り、有り難く感謝申し上げます。

昭和十八年一月末、下士官候補者集合教育のため、齊々哈爾工兵下士官候補者隊分遣を命ぜられて入隊、六月一日兵長となり、十一月三十日卒業しました。この時私は序列第一番の優等の成績を残し、中隊、連隊、父母の名誉のため頑張ろうと決心をして人一倍の努力をしました。典範令を読む時間が多くないので、夜、消灯後寝台の毛布の中に首をつつこんで小さい懐中電灯の光で眠る時間をさいいて、とにかく科学の勉強をしました。努力の甲斐あり、好成績で卒業帰隊、中隊長殿にも喜んでいただき、連隊長殿は少尉候補生の資格じゃと言って、中隊長殿に「うんと目をかけて、大事にして将来の大成を望むよう」と有り難く申されました。

昭和十八年十二月一日、晴れて伍長に任官です。「やれ嬉しや、今まで死んでたまるかと頑張った甲斐があった。今後更に努力しよう」と心中深く誓ったことです。

下士官候補者隊での教育内容の大略は、工兵の基本の土方、漕舟、連結とそれ以外には、渡河、架橋、障

害物（例えば鉄条網等）の破壊、トーチカの攻撃、爆破（黄色や黒色の火薬、ダイナマイト、雷管、導火線等々その他）、器材取扱い、分隊長としてどうするかなど、寸刻の油断もなく複雑な術、学科の修得と復習、自習、記帳等と目の回る超多忙の毎日で、この難かしい仕事を優等の序列で卒業できたことは、将来への大きな自信と希望につながりました。また父母に対しては頑健な身と良い頭脳を授けてくれた感謝となりました。

人の世の言い伝えにも「良い事は続くもの」とあるように、私にも伍長任官の後、内地へ初年兵受領の晴仕事を与えられ、喜びが二重奏となりました。連隊中の下士官（ほとんど上級先任者ばかり）の祝福、激励、そねみ、私用の依頼、その他で俄然「時の人」となり、一層の忙しさが加重され、嬉しさと責任の重大さに足も地につかず、ただもう夢中で出発準備に没頭したことです。この大役拜命には連隊長殿、中隊長殿の強力なご推薦あつてのことと後で知らされました。

昭和十九年一月三日、勇躍、虎林を出発して善通寺

への到着は一月十三日、即日四日間の休暇を与えられ自宅へ。入隊以来二年日という早さで、衆人にうらやましがられる幸運に恵まれ、父母や親戚、ご近所の方々と挨拶する身は、夢ではないかと何回も我が身をツネって現実であることを確認したことです。夢の四日の休暇はアツと言う間に過ぎ去り、帰隊してようやく正気に戻ったというのが正味です。

初年兵受領の輸送業務もまた超多忙をきわめました。輸送指揮官は古参中尉殿、曹長、軍曹数名、私と同じ新品伍長一名で、一個連隊三個中隊分の初年兵六十一名が相手でした。最も若い新品伍長二人に一切を押しつけられ、食事、官給品の支給分配、点呼と人員掌握、健康保持その他と、物言わぬ物品と異なり生きた人間、まして環境、業務、団体生活に不慣れの新兵ばかりが相手のこととて、後で振り返ると、自分ながらよくやったと思うことでした。それでも輸送指揮官及び諸上司の御指導よろしきを得て、全員無事虎林の原隊へ到着できたことは誠に幸運の一語につきると思ひ、また一つの峠を越えた自信もできました。

昭和十九年三月十日、下士官候補者及び幹部候補生が連隊本部で集合教育のため助教は私一人、下士候と幹候計二十名くらいで、若い伍長の私は肉体のこともよりの精神の分野でまた鍛えられました。冬季及び夏季の演習、漕舟、野戦築城、架橋、ガス、トーチカ攻撃、爆破等多項目であり、また指揮者としての実兵指揮も大事なことです。

昭和十九年十一月二十八日、佳木斯第六一九部隊において実施せらるる工兵部隊下士官器材取扱い集合教育に参加し、十二月三十一日帰隊しました。この間、十九年十二月一日をもって軍曹に任ぜられました。

昭和二十年一月一日、中隊の兵器係を命ぜられました。また連隊としての任務は虎林付近地区の戦時防衛です。

先に述べました工兵第十一連隊とは、明治二十九年十二月五日広島工兵第五連隊内に弧々の声をあげ、善通寺工兵第十一連隊として創設されました。昭和十一年五月三十日第十一連隊と改正。昭和二十年九月十一日軍令陸甲第一一六号により復員完結し、工兵第十一

連隊はその歴史の幕を閉じたわけです。

この間の歴代連(大)隊長は、初代の陸軍工兵少佐藤要蔵氏に始まり、最後は陸軍大佐岩本清氏に至るまで延べ二十一名の交代あり、部隊及び個人に授与された感状は、日露戦争、満州事変、支那事変にわたり十八回の多きを数えます。

第三軍司令官 男爵 乃木希典 (十三回)

満州軍総司令官 侯爵 大山 巖 (一回)

鴨緑江軍司令官 男爵 川村景明 (三回)

上海派遣軍司令官 陸軍大将

正三位勲一等功三級 白川義則 (一回)

上海派遣軍司令官 陸軍大将

正三位勲一等 松井右根 (一回)

の各司令官より榮譽を全軍に示されました。なかでも明治三十七年十二月十九日、満州軍総司令官大山巖より付与された感状は、かの勇名な日露戦争の旅順攻撃のうち東鶏冠山要塞を坑道掘進により接近し(地上攻撃回数強行せるもすべて犠牲のみ大きく失敗)、二、二〇〇キロの爆弾を使って爆破し、突撃占領を可能に

したという、その功著大なりと認められたものです。

この坑道作戦は日支事変上海戦線の羅店鎮白壁の家を昭和十二年九月二十三日爆破した際にも、接近戦法として採用、成功し、師団長より賞状を授与されています。

昭和二十年四月六日「陸軍機密第一五〇号」により横井中尉以下二三九名虎林出發。私は兵器弾薬係として部隊と同行。四月九日鮮満国境(安東)通過、四月十六日釜山港出發、四月十七日博多港着、五月二日高知着。長岡郡大津村に位置し第十一師団戦闘指令所(介良村鉢伏山)陣地構築並びに戦時防衛に任せられました。

この間に釜山より博多に至る海上輸送は敵の潜水艦や飛行機の攻撃にさらされ、灯火管制、ジグザグ航法、見張り、その他攻撃配置で緊張のしどろしどろでしたが、無事博多に入港、その喜びは大変なものでした。

この輸送では私は第二梯団に属していましたが、第一、第三の各梯団も皆無事に敦賀や西舞鶴を経て高知入りに成功し、爾後、高知、徳島の各平地に布陣し、

米軍機動部隊の土佐湾侵入上陸に備えての作戦準備、教育訓練に邁進しました。

工兵連隊では陣地設備（術工物）、新設補強交通網の補修、対戦車肉攻挺身斬込等も行われました。

七月五日午前一時より二時三十分まで、敵B29約四十機が高知市及び周辺地区を焼夷弾攻撃。連隊は主力をもって救援作業に出動しました。私には初めての实战体験でした。しかし空中の強力な空飛ぶ要塞B29に対して地上の工兵は有効な攻撃もできず、ただもう口惜しく無念に天をおおぐのみです。大津農協事務所の裏山に横穴をあけて多量の黄色葉、銃弾、器材を入れてあるので、私は中隊の兵器係として、その警戒に任じていました。空中から一発も来ぬように神仏に祈るばかりです。一発命中すればもう最後ですから、幸いにも無事にすみ、連隊でも人員その他に損害もなくて何よりでした。

七月二十五日、敵機の襲来は逐次頻繁化、本土の小都市の大部分を焼夷弾攻撃されました。この日高知市付近へ来襲せるもの艦上機二十五機、B29は七十機、

もう対抗できる兵力もなく、敵の思うままになる冷酷無惨な戦局でした。

相次ぐ玉砕、祖国焦土化、ソ連の満州侵攻、広島・長崎への原爆投下、ポツダム宣言の受諾、無条件降伏と坂道を転落する雪だるまのごとく、大日本帝国の誇りも名譽も地におちたことです。

八月十五日の玉音放送後、各部隊は承認必謹、大規模な混乱もなく、解散・復員へと虚脱の中を推移して行く状態を見て、別世界の夢のように思えました。

連隊は虎林屯営を出発以来ここに五カ月、血汗築城作業に邁進し、灼熱練武に精進し、今や郷土防衛に将また敵英米撃滅に闘魂烈々として満を持し、準備を完成したところ、凶らざりき事、ついに、ここに至らんとは涙を揮って戈を擲つ（なげく）の余儀なきなりです。連隊は勅諭を畏み堪え難きを忍び、一糸乱れざる行動に就きました。

九月九日 復員令下り復員第一日。

九月十一日 復員完結。連隊は七時三十分より介良国民学校校庭において復員式を挙行し、創立以来四十

九年の光輝ある歴史をここに閉じました。

郷里の実家に帰宅しました。弟は既に沖繩で戦死していましたので、父母は私の帰宅を心より喜んでいました。父母と同居して父と共に大工に従事、仕事も生活も順調でした。

昭和二十年十二月十九日結婚。三男一女、孫十人に恵まれています。現在、恩欠連伊予三島支部長として微力ながら尽くしております。

自宅より一五〇メートルの距離にある具定神社（地区の氏神さま）の名誉総代、具定町太鼓台保存会長もつとめてさせていただいております。

具定神社入口の石の鳥居には「大正七年一月 世話人福井好太郎」と刻みこまれています。これは祖父です。神社の社殿は私が昭和二十五年、三十歳のとき責任者として推され宮大工の勉強をしながら建立しました。思い出深い社殿です。

また神社の境内に建つ具定集会所は平成五年九月、私が建設委員長となり落成させたものです。このようにして郷土の文化生活のために、代々の大工請負業を

通じて働かせいただき、お陰で毎日元気に暮らしております。

なお、本調査の参考資料として工兵第十一連隊歴史の外、大平弘氏（元隊員で第四十師団工兵第四十連隊に編入中隊長として勤務、現在は賀勝橋会―中支の武昌に近く、元工兵第四十連隊のあった所―の世話人である）の著書「素石」第二版も利用させていただきました。

戦争が私たちの青春だった

一粒の麦の尊さ

岐阜県 酒井清 幸

―酒井さんは、昭和十八年五月、三島の野戦重砲から満州、本土防衛への軍歴だと聞きました。

部隊の一部はサイパン玉砕、日本近海に敵潜水艇出没のなか、新潟上陸、満州へ残ればシベリア抑留と、自らは選べぬ運命の幸を握られたわ